

射水市指定無形民俗文化財

くろ かわ よ たか
黒河夜高祭



..... 行燈行列経路

①~⑤ 見どころ

公衆トイレ

駐車場
(臨時駐車場も含まれます)

- 経路などは、天候その他の理由により変更される場合があります。
- 行燈行列は、7つの町内会が半数に分かれて、それぞれ交代で黒河神社、西養寺へ参拝します。

黒河コミュニティセンターから黒河神社まで 250m 徒歩約 5分
 黒河コミュニティセンターから歌の森小学校まで 700m 徒歩約 14分
 黒河コミュニティセンターから黒河1区交差点まで 500m 徒歩約 10分



お問い合わせ先

射水市教育委員会 生涯学習・スポーツ課
 〒939-0294 富山県射水市新開発410番地1

TEL: 0766-51-6637 FAX: 0766-51-6663
 E-mail: bunkazai@city.imizu.lg.jp

黒河夜高祭

黒河夜高祭は、射水市黒河地区一帯で、毎年8月20～26日の間の土曜日に行われます。黒河地区にある7町内（1～7区）の子どもたちが、夜高行燈を手にして囃子唄を唄いながら地区内を廻る行事です。

祭礼の舞台 黒河

黒河地区は、江戸時代以前の北陸道と、飛騨方面への街道との分岐点にあたる交通の便に恵まれた場所に形成された集落です。

室町時代の14世紀には真言律宗の宝蘭寺、戦国時代には浄土真宗の専福寺（現高岡市）という地方の中心的な寺院がありました。

江戸時代に、砺波郡から六カ用水が引かれると、黒河の住民が老田（富山市）から水戸田（射水市）付近までの不要となった溜池を水田に変えたため、各地に「黒河又新」の地名が残っています。

かつて、黒河地区の北方には湿地や森が広がっていました。幕末に作られた俳諧集「多磨比呂飛」では、この地が「歌の森」と紹介され、枯野の鷺や池の千鳥などを詠んだ俳句が掲載されています。



黒河地区（南東から）

黒河夜高祭の起源

夜高とは、夜・高く火を掲げて神霊を招き、五穀豊穡を願う行事といわれます。

黒河の夜高は、文化12年（1815）に、黒河地区の南にあった「竹山」の加茂社建替えを祝って始まったと伝わります。かつては「ヨータカ」と呼ばれ、加茂社と西養寺の間を往復していました。

昭和48年からは「夜高祭」となり、子どもたちが中心の行事として受け継がれています。

もとは5月5日に行われていましたが、昭和49年に8月23日（地蔵盆の日）となり、平成10年からは8月20～26日の間の土曜日に行われています。

黒河夜高祭は、江戸時代末に農村行事の「夜高」と、「石見重太郎伝説」・「我」が一体となってできあがったものと考えられています。

囃子唄

「チョウサイタ ニワカ ゴモンザイタ（オモンザイタ）ニワカ サンモンザケニ ヨウタ ヨウタ」と唄う独特な囃子唄です。酒に酔って俄を楽しむ、という意味と考えられています。

俄（にわか）

江戸～明治時代に、宴席や路上などで行われた即興の踊りや短い芝居のことです。獅子舞・仮装・行列・屋台・行燈なども含まれます。

見どころ（地図中の①～⑤の場所に対応しています。）



夜高行燈

夜高行燈

田楽行燈に、武者絵などの好みの絵を描いた紙を貼って持ち手となる棒を通したものです。中にロウソクを入れて火を灯します。

昭和30年代には、将棋の駒に似た形の大行燈も作られていました。昭和55年頃からは、台車に様々な形の行燈を載せた山車が出されるようになりました。



山車

竹山の加茂社跡と 岩見重太郎のヒビ退治

竹山にあった加茂社は、正徳2年（1712）の記録に現れる古い神社です。講談などで有名な武者「岩見重太郎」が、この加茂社で、人身御供とされる村娘を助けるため、ヒビを退治したという伝説があります。

竹山の加茂社まで、人身御供を送るときに灯した行燈の名残が夜高であるという言い伝えもあり、加茂社跡は、黒河夜高祭の起源とかわりの深い場所といえます。

夜高祭の当日には、黒河コミュニティセンターで、子どもたちによる「岩見重太郎のヒビ退治」の劇が上演されています。



夜高行燈に描かれた岩見重太郎



「とやまの歴史的まちなみ百選」に選ばれた黒河の街並みの中を、夜高行燈の行列と山車が練り歩きます。



各町内から出発した夜高行燈と山車の行列が、続々とコミュニティセンターへ集まります。



式典の後、大集会場では地区の子どもたちによる「岩見重太郎のヒビ退治」の劇が上演されます。



町内会ごとに黒河神社境内へ入って参道を進み、拝殿前で並んで拝礼します。



行燈行列が町内会ごとに西養寺へ入り、鐘楼の梵鐘を突いた後、本堂前まで移動して礼拝します。